

〔共同研究：日本と東アジアのコミュニケーションの総合的研究〕

五島・長崎をめぐる異文化交流の トポグラフィー

——鎖国史観からグローバル・ヒストリーの視点へ——
序論にかえて

遠 山 淳

極東の島：日本

海は広いな 大きいな
月が昇るし 日が沈む
・・・・・・・・・・・・・・・・
海にお船を 浮かばして
行ってみたいな よその国

(文部省唱歌)

日本は、ヨーロッパから見て、遠い。今も遠い。「極東」——東の果てである。中国語では「遠東」と言う。“Far East”の訳語である。ハズレ感覚の位置付けである。

梅棹忠夫は『文明の生態史観』において、文化における距離感を指摘する。日本人は「ほんとうの文化は、どこかほかのところでつくられるものであって、自分のところのは、なんとなくおとっているという意識をもつ」と述べている。内田樹はこれを受けて日本および日本人の「辺境」性を取り上げ、『日本辺境論』にまとめた。筆者も日本文化・社会の両立的特性を、巨大文明の周縁に位置するトポグラフィーに置いている。しかもこの特性は日本文化・社会の細部に至るまでをフラクタルに支配しており、日本は中心（身の置き所）をめぐる、自文化（日本）と他文化（海外）との間を振り子運動のごとく激しく揺れる。

かつて海に国境はなかった。船乗りたちは交易を求め、また大きな可能性を求めて海を渡った。海には権力に縛られない自由があった。漁民、商人、海賊、宗教者、これら境界人にとっては、海は決して「隔てる」ものではなく、「つなげる」ものであった（村井章介）。

五島・長崎は日本列島の西端にあって、日本の中心（例えば、大阪・京都）へは、直線距離にすれば、ソウルや上海へ行くのとほぼ等距離である。現在も、空路では等しく約1時間

半の飛行である。しかしながら、鉄道が敷かれ陸路の旅が便利になるまでは、上方や江戸への旅は、陸路や海路を経て、1～2か月もかかる難行であった。それに比べると、遣唐史時代ですら、船旅だけで行け、しかも順調に行けば、1週間ほど（上田雄は、遣唐使船の平均航海時間は7.1日であり、空海たちが乗った第14回派遣船団は極めて例外的であったとする。）で到達できる上海やニンポー（寧波）の方が、精神的にもより近い関係であった。事実、江戸時代後期には、五島・福江藩は幕府から近海に出没する外国船の見張り役（遠見番所）を仰せつかい、それに代えて江戸参府を免除されたりもした。西国の小藩にあっては、江戸への参勤は経済的負担が大変だったのである。

江戸幕府による長い海禁政策によって、外国船に開かれた港（4つの口：長崎、対馬、鹿児島、松前）も日本人には開かれておらず、日本をめぐる海は、日本人にとっては「隔てる」海、閉ざされた海となっていた。長崎の出島も外国からの「入り口」であり、日本人の「出口」ではなかった。大多数の日本人の意識は、「オランダ風説書」の存在にもかかわらず、列島の海岸線を越すことはなかった。近世初期以来の日本の「大航海時代」とも言える朱印船時代の波濤は静まってしまった。かつては東シナ海や南シナ海を自由に渡り、多くの日本人町が存在したが、やがて海外がまことに「遠いくに」となっていた。

西への想い／南への憧れ：西方浄土～補陀落～高山右近

海のあなたの遥けき国へ

いつも夢路の波枕、

波の枕のなくなぐぞ、

こがれ憧れわたるかな、

海のあなたの遥けき国へ。

——テオドル・オオバネル

「海潮音」（上田敏訳）より

——東方への想い／南への憧れ：ヨーロッパの場合——

比較のために、ヨーロッパの場合も少し見ておきたい。

カアル・ブッセの「山のあなた」ほどには知られていないが、オオバネルの詩にあるように、「遠いくに」への憧れは、ヨーロッパ人にも非常に強いものがあつた。トーマ作曲の『ミニヨン』で歌われる「君よ知るや南の国」はゲーテの原作であるが、アルプスを越え、またイギリス人たちは海を渡りヨーロッパ文明の源流とも言われるイタリアやギリシャに向かった。英国文学の中堅を担ったバイロン、ワーズワス、スコット、コウルリッジ、シェリー、キーツ、ディケンズ等々、枚挙に暇がない。英国の上流階級では、子弟の教育の仕上げにヨーロッパ大陸に2年も3年も遊学するグランド・ツアーの風習があつた。太陽の国々、南への憧憬の証明である。

少し余談になるが、聖徳太子は遣隋使に持たせた煬帝への書では、龍樹著／鳩摩羅汁訳の『大智度論』にある「日出る処」を倭に、「日没する処」を隋に比定した。これも後で述べる「パライーズの海」で述べるべきことではあるが、ヨーロッパ人たちは「東」（詳しくは東方／東向き）にこだわった。「日出る処 (the Orient)」から「ユダヤの王」誕生の「よき知らせ」を伝えた「東方の3博士 (Magi)」, 「光は東方より (ex oriente lux) 至る」し、聖堂の多くは、先住異教徒たちの宗教（太陽信仰）の聖なる場所を流用した影響で、主祭壇が東向きに建てられている。（初期キリスト教では、キリストを「義の太陽」とも呼んだ。）また、死者を葬る際には足を東向きに埋める風習があった（日本における「北枕」に似ている）。これらの方向性・東向きのことを、キリスト教世界では「オリエンテーション (orientation)」と呼んでいる。ひっきょう、ヨーロッパとは「日没する処 (the Occident)」なのである。

ちなみに、シベリア東端の町・ウラジオストック (Vladivostok) とは、「東方を征服せよ」の意味である。

——西への想い／南への憧れ：日本の場合——

いくつかの事例を以下に挙げてみる。

求法の海：入唐八家等、最澄、空海、円仁を筆頭に多くの仏教者、多くの高度文明を求めた日本からの使者たちが西の海へ向かった。

西方浄土の信仰は、本朝、唐（震旦 [中国]）、天竺という3国世界観ともうまく共存し、日本中に西方浄土の守護仏・阿弥陀信仰を定着させた。

西行：歌人西行は法名を円位と言う真言宗の僧侶である。佐藤義清は出家して西行と称したが、「西行」とはむしろ歌人としての筆名であるとしたい。彼は西へ東へと旅をよくした。伊勢に止どまって神宮を参拝した。「深く入りて神路の奥をたづぬればまた上もなき峰の松風」と詠み、インドの仏跡の霊鷲山を伊勢神宮・神路山に見た。大日如来を信奉する西行にとっては、神も仏なのである。神仏習合という時代精神を合わせ持つ歌人であった。四国を行脚したときは、友人西住と同行した。西行と西住は西への旅を共に同行として心を通わせた。

折口信夫：釋迦空という法名を持つ歌人・民俗学者折口信夫は、死後の安住の地を西方に求めた。彼自身と養子春洋（はるみ）の父子墓は能登の羽咋市の海辺の墓地にあり、ここから海に沈む美しい夕日が眺められる。神道家として名を成した国文学者であったが、西方浄土へのこだわりも強かったことが分かる（富岡多恵子、林浩平）。

海外の日本人：日本人最初のキリシタン・アンジローは、インドよりザビエルを鹿児島へ案内した。近松門左衛門の「国性爺合戦」のモデル鄭成功（国姓爺 [朱]）や天竺徳兵衛（「天竺渡海物語」の主人公）は日本人が海外で大活躍をする痛快な活劇である。どちらも実話に基づいている。前者は長崎人を母に持つ混血の英雄である。台湾（高砂）が舞台であり、オランダ勢力を台湾から一掃した。後者は15歳のときに、角倉与一の船で長崎福田を出

て、翌年2回目にはヤン・ヨーステンの船でインドに渡り仏跡も訪ねた。播州高砂の出身である。中でも最も知られているのがタイ・アユタヤで活躍した山田長政であろう。なお、高山右近の葬儀が執り行われたマニラでは、2000人を越す日本人が参列したという（片岡弥吉）。

朱印船時代：秀吉や家康の朱印状を持って海外に交易を求め、歴史に名をとどめた商人たちも多い。京の角倉了以、茶屋四郎次郎、堺の納屋助左衛門、長崎、博多、大湊、平野郷など後の糸割符貿易につながる豪商たちがいた。平野の末吉孫左衛門吉安、アンナンの王妃を連れて戻った長崎（出身は肥後）の荒木宗太郎などが著名である。

高山右近：戦国時代のキリシタン大名である。摂津高槻城主を経て、後に明石城主となった。キリスト教禁教令発布の際に信仰を捨てず除封、追放された。その後前田利家に招かれ3万石を与えられたが国外追放となる。カトリックでは自死は禁じられていたのである。

右近たちは5隻のぼろ船ジャンクに乗せられ、3隻はマカオ（天川）（ポルトガル勢力の中心地）へ、右近たちの2隻には右近の娘、孫、また内藤飛騨守如安と家族、神父や信者350人以上が乗船し、マニラ（スペイン勢力の中心地）を目指した。

1614年11月8日、長崎福田を出て、12月11日、呂宋マニラに移る。彼地では熱狂的な大歓迎を受けたが、マニラ到着後病を得て、約40日で死を迎えた。葬儀は、総督、大司教以下全市をあげる大きなものであった。右近の足に接吻をする者が後を絶たなかった。マニラやサン・ミゲル在住の日本人2000人も参列した大葬儀であった。サン・ミゲルは当時の日本人町の一つであった。

右近は霊名を“Justo”（義の人）と言い、彼はこの名を花押にも用いていた。「重出（じゅうしゅつ）」がそれである。ポルトガル語の発音では「じゅうしゅつ」のほうがむしろ正しい。また彼は、千利休直伝の茶人であり「七哲（高足）」の一人であった。南坊（みなみのほう）等伯と号した。南蛮渡来の宗教と向き合い、神父や多くの信者に囲まれながら信仰を全うした高潔の人であった。武士として、また茶人として、またキリスト者として、南方の太陽に向かった「義の人」であった。

補陀落渡海・観音信仰：中世日本における観音信仰の一形態として、僧侶たちが仏教修行のため紀州・那智の海岸より目なし船に乗って、南海にあるとされる補陀落山を目指した。この死を決した行為は多くの信者から尊敬を集め、那智にある補陀落山寺の僧侶に渡海への暗黙の期待を持たせたが、やがては、死後に送る水葬の一形式と化した。

補陀落（普陀洛）とは、インド南端の海岸にあり観音が住むという聖なる山をいう。チベット・ラサにあるグライ＝ラマの宮殿・ポタラ宮（Potalaka）は、インド南端の海岸にはないが、そこでは観音菩薩の生まれ変わりとされる「生き仏」が修行を積みグライ＝ラマとなる。グライ＝ラマとはモンゴル語「大海（Dalai）」とチベット語「(Lama) 尊師」から成る称号である。

この補陀落・観音信仰と日本の禁教時代のキリシタンたちの殉教を結び付けて考察したのが、川村湊である。川村は、「日本にキリスト教を布教に来たイエズス会の宣教師たちが、

観音浄土へと憧れて、海岸から船出する日本人の信仰者たちを目撃し」本国に報告をしていることに注目している。『日葡辞書』（イエズス会日本学林、17世紀初頭）では、補陀落を「観音のパライーズ（天国）」との訳を与えている。

五島・長崎のキリシタン墓地：墓地の多くは海を望める高台にあり、西方の夕日に輝く十字の墓石と金色の霊名が映え、彼らの天国（パライーズ）に至る海上と天空にかかる自然の天主堂のフレスコ画となっている。まさに聖歌が聞こえてくるようだ。上五島出身の天才建築家・鉄川与助は五島・西海に多くの教会（天主堂）を残したが、彼も教会堂のオリエンテーション（東向き）には拘わっていなかった。

〔西〕果て・本涯の島：五島は『古事記』にも知訶島として登場する。以降、漢字の表記はいろいろと変わるが、小近・大近、小値賀島などと呼ばれ現在の五島市、新上五島町、小値賀町、となった。なお小値賀は旧平戸藩であり、宇久は現在は佐世保市である。

五島（現・福江島）の三井楽は、かつて「みみらく」という古名でも呼ばれ、平安時代の京では「死者に再びあえる地」として知られていた。『捌蛉日記』（右大将道綱の母）でも言及され、遣唐使たちや空海が「辞本涯（本朝の果てを辞した）（『性霊集』）の地」に加えて、新しい都市伝説が誕生していた。西方浄土への憧れと重なって、みみらくを昇華させていったものであろうか。五島・三井楽が本朝最西の地・最果ての地であるとのイメージが定着していた。

五島をフィールドワークしてみて感じるものの一つに、島民たちの辺境・離島感覚を感じてしまうことが多い。いまだに「本涯の島」を意識されているようなのである。先祖たちをたどるときも、源氏ではなく、敗者である平家とのつながりを前面に出される。五島（宇久）家も平戸・松浦氏との関係で言えば、嵯峨源氏とか武田源氏の流れであると比定しても不思議ではない。初代・宇久家盛が五島列島北端の宇久島で宇久家を起こした（1187年）が、その出自については、平、武田、松浦など諸説があり、なかでも平家落人説が、島民には最も人気がある。

五島は流刑地でもあった。長崎犯科帳には流刑の記録も多くある。1692年、高野山より125人の行人方の僧侶が五島に配流された。島民との交流も少しではあるがあったようで、中央の文化・情報の伝播にも何らかの影響があったことが考えられる。五島では空海伝説、大宝寺（西の高野山）、明星院（真言宗）、大円寺（曹洞宗）など、真言宗と曹洞宗が強い。江戸中期には、五島へ来る流人は、壱岐に送られる者たちよりも罪が軽かったようである。やはり五島は遠島の地であり、キリシタンたちが逃れ隠れる地であったのかも知れない。長崎から隔離する五島灘の存在は島民たちの意識を離島（ハズレ）感覚にしていたのであろうか。先祖たちの見た海の向こうには、無限の可能性があったはずである。徳川幕府・明治政府以降の「閉ざされた海——海禁政策」が功を奏してきたのか、自らが「流人」のごとく萎縮しているように感じてしまう。消滅していくカクレキリシタンを知るにつけ、もう彼らにとって、西への道、南への海はなくなってしまったのか、慶応4（1868）年、竹島への

脱出・移住をこころみた野崎島野首・船森の6名の潜伏キリシタンは、朝鮮に漂着、再度試みたが、結局は失敗し、薩摩藩により送り届けられた。潜伏キリシタンは、このようにして日本文化の泥海に交雑し、消えていくのか。日本という「辺境（内田樹）」の中の辺境なのだろうか。かつては安住の地を求め、「青い鳥」を追い続けてきたこれらの人々に対し、思いを深くするばかりである。

パライズの海：浦上・外^{そとめ}海～黒島・平戸・生月～五島

この春は桜花かや、散るぢるやナ
 又来る時は蕾開くる花であるぞやナ
 （生月島・サンジュワン様の歌）

・・・・・・・・・・・・・・・・

参ろうやナ、パライズの寺に参ろうやナ
 パライズの寺と申するやナ
 広い寺と申するやナ
 広い狭いはわが胸にあるぞやナ
 （生月島・ダンジク様の歌）

五島・長崎の海はキリシタン受難の血の海でもある。1587年、豊臣秀吉は九州平定後、博多において遂に伴天連追放令を出す。1596年のサン・フェリーペ号事件をきっかけに、キリスト教布教への姿勢がさらに厳しくなった。翌1597年2月には、秀吉の命により26名の宣教師たちが長崎・西坂の刑場で殉教した。「二十六聖人の殉教」である。フランシスコ会宣教師6名、日本人イエズス会士3名、日本人信徒17名である。その中には、パウロ三木、ディエゴ喜左衛門と五島出身のヨハネ五島（ジュアン＝宗庵）もいた。ジュアンはまだ20歳前の青年であった。最年少のルドビコ茨木はまだ12歳である。京などにいた宣教師たち24名は、見せしめのために、耳をそがれ、裸足で長崎まで歩かされたのだが、道中でさらにもう2名が加わった。後続する日本キリシタン迫害史の荒れ狂う波濤を予兆するような事件であった。ローマでは、「日本のキリシタンの世紀」とまで期待を持ったが、4000人も殉教者（松田毅一）を出し、キリスト教前史を除けば、世界にも前例を見ない残虐な歴史を残してしまった。血塗られた信仰の海の始まりである。

徳川幕府による禁教令（1612-14年）以降取り調べはさらに厳しくなり、多くのキリシタンたちは潜伏の道を選び始める。江戸、上方、東北を始め、蝦夷地を含む日本全国でキリシタンの弾圧と宗門改めが行われた。長崎を中心とする九州では特に探索が厳しかった。

イエズス会幹部（7名の創設会員の一人）であった、フランシスコ・ザビエルによる平戸に始まるキリスト教の布教は、同会（Society of Jesus）の戦略もあって、日本社会の上層部に浸透した。きらびやかな衣服を身に付け、大名たちにはヨーロッパの珍しい品々を贈るなど、瞬くうちに布教は「成功」した。この作戦は、後続の托鉢修道会と呼ばれるフランス

コ修道会やベネディクト修道会などが庶民すなわち農民の目線で、村人たちの中に飛び込んでいったのとは大違いである。

最初のキリシタン大名は肥前長崎の大村純忠（洗礼名バルトロメイ）であった。1563年のことである。シュタイシェン神父の『切支丹大名記』では46家61名をキリシタン大名としている。純忠はその先達であり、横瀬浦は南蛮貿易で大いに賑わった。また彼は長崎、茂木をイエズス会に寄進、同様にキリシタン大名・有馬晴信も浦上村を同会に寄進した。やがて奉行が置かれ長崎は天領となる。晴信は岡本大八事件で斬首となり、元和の大殉教が起きる。絵踏みも始り、1639年、鎖国令も敷かれ、キリシタン弾圧は絶頂期を迎える。出島の完成と共にポルトガル人を排除し、代わってオランダ人を入れる。オランダ東インド会社の宗教抜きの作戦が功を奏したことになる。イエズス会の国内最後の神父小西マンショの殉教で、パテレン（padre）たちも途絶えてしまった。キリシタンの潜伏生活が本格化する。

転ぶか隠れるか。信者たちの多くは、檀那寺に属しオモテとウラの「二重信仰」の形をとった。絵踏みとか寺社参りや仏式葬儀の後では、「経消し（経崩し）」や「コンチリサン（後悔）」のオラショ（祈り）を唱え、信仰に背いたことへの許しを請うた。納戸神や子安観音に似せたマリヤ観音などが密かにまつられる。

大阪冬の陣・夏の陣が終わり、島原の乱が勃発する。旧有馬藩家臣や豊臣方に加わった武士、キリシタン農民を含む37,000人も不平集団が徳川幕府に抵抗する。かつては有村藩で、セミナリヨやコレジヨがあり日本におけるキリシタン文化の中心であった口之津、加津佐など島原からの一揆であった。結果は兵糧攻めで原城は総崩れとなり、一揆軍は皆殺しとなり、天草四郎の首は出島の入り口に晒された。

弾圧はますます厳しくなり、多くのキリシタンが潜伏した。旧有馬領や大村領に隠れた。浦上や外海が特に多い。外海からは、黒島、平戸、生月、五島へと逃れた。外海は大村藩と鍋島藩の飛地が入り組んでおり、絵踏みすらしなかった鍋島藩に比べ、大村藩は詮議が非常に厳しく、外海からの移住が大変多かった。また大村藩は人口政策が厳しく、長男以外の出生を認めず、間引きや嬰兒殺しができないことが潜伏キリシタン農民たちを、北へ、西へと追いやった。信者たちは地上の楽園（パライーズ）を求めて海を渡った。

生月島の沖、平戸島との間にカクレキリシタン（宮崎賢太郎の表記法による）の聖地・中江ノ島がある。多くの信者の血を流した小さな島であるが、今はカクレキリシタン部落の三役の一人である水方が新しく受洗（お授け）のためや儀式で用いる水——聖水（サンジュワン様の御水）をとる島として知られている。

生月島には数多くの聖地がある。どれもこれも信仰が露見して、無慈悲にも殺戮された住民の殉教地である。一見きれいな見事な砂浜が深い悲しみの物語を秘めている。追われ、追われて「行き着き（生属き）」たところも安住の地ではなかったのである。

外海から五島への潜伏キリシタンの移住は、1772年に男女70人が「大村より、外れ証文をもって」渡来してきたという記録があるようだ。また1797年には、「大村の亡民108人に移住

の許可があり、次いで続々と1000人を越す農民たちが五島に来た。結局は、3000人もの移住者が来たらしい。こうして、アルメイダ宣教師（南蛮医）や助手の日本人ロレンソ以来途絶えていたキリシタンの灯が五島に再び点されたのである。しかしながら、その安らぎも長くは続かなかった。浦上の潜伏キリシタンたちが、フランス寺と呼ばれた大浦天主堂にてプチジャン神父に信仰を告白、1865年の「信徒発見」から起きた浦上四番崩れや五島崩れが余りにも過酷であり、明治になっても禁教政策を政府が変えなかったため、在留外国人たちは、このことを本国に報告していた。

この禁教令の続行は、不平等条約の改正を目論んで米欧へ派遣した岩倉具視と使節団にとって、極めて不利な条件であった。このためもあって、各国で大歓迎を受けたにもかかわらず、肝心の条約改正はまったく相手にされなかった。邪宗門の禁教令の高札が撤去されたのは1873年、明治6年であった。

なぜこのキリシタン時代に興味をもつのかを考えてみよう。遠藤周作は、「歴史の中で二つの異質の思想、宗教、文化、精神が衝突した時がもっとも興味ある時代とするなら、キリシタン時代とは仏教渡来のそれと同じように日本人が新しいものと闘い、それをわがものにしようとした季節である。」続けて、「キリシタン時代に我々が興味を持つのは、日本人が初めて西洋とぶつかった時代だからである。西洋と四つに組んだ時代だからである。」と述べている。われわれは、この時代に命を懸けて西洋の宗教と向き合い、背信か殉教かの二者択一に迫られ、名誉をかけて生き抜いた武士たちを知っている。

当時の武士たちは主君のためならば、自死も潔く受け入れなければならない風土にあった。侍の殉死とキリシタンの殉教とは同じではないが、相通じるころもあったのではないか。戦国時代から江戸時代初期までは、武士階級は日常的に死と近いところで生きていた。名誉のためには死の準備ができていたと言ってもいい。この時代は丁度キリシタン時代と重なる。イエズス会は階層の上位から改宗を迫った。領主、その家族、家臣たち、家族たち……この戦略は、アイルランドやイングランドの宣教師たちが、キリスト教をドイツや北欧に宣教して成功したのと同じやり方である。ヨーロッパでは、まず主君が受洗し、部下たちに改宗を強要し、百人、千人単位で、雪崩のごとくキリスト教に改宗していった。イエズス会は日本における宣教戦略を研究してきたに違いない。彼らは貴族の出身者が多かったし、イグナチオ・ロヨラは軍人の出身でもあった。托鉢修道士のようにぼろを着て裸足で民衆の中に入ることはなかった。日本人たちは、彼らの持ち物に憧れ、「南蛮かぶれ」という現象まで引き起こした。武将たちは争って西洋の武具を求め、町の若者たちは、マントや小物を身に付けた。ロザリオ、メダイ、十字架の飾りなどに夢中になった。太平洋戦争後の日本で見た若者たちの「アメリカかぶれ」という現象と変わらない。

日本人の異文化に対する姿勢は厳しい。異文化接触の初期には、大歓迎の風を見せ、その受容が大きな波となって、大きくなりすぎると必ず反対の動きが生じ、それが真の受容ではなく、精神性を伴わない上辺だけの、物的対象に限られるようである。6世紀の仏教伝来の

ときも、欽明天皇は、仏典と仏像を蘇我氏に預け、「試みに」受け入れるようにした。パイロット・スタディで様子見をしたのである。太平洋戦争の終局でポツダム宣言を「黙殺」したときと同様に、見て見ぬふりをした。キリスト教という文化の中心は黙殺して、日本の支配層は、武器・武具を含むヨーロッパ文明の物質的側面だけに限り、興味をもった。その典型ともいえるのが、鉄炮の発射に不可欠の硝酸（硝石）の輸入であった。日本では産出しなかったのである。

突然、異文化には排除の勧告・命令が下る。キリスト教禁教令は1612-14年のことである。仏教も、明治になって突然、**神仏分離令**（判然令）を出し、仏教受容後実に1300年も経って、仏教を異教とする国家神道への方向を打ち出した。仏教排除令である。廃仏毀釈の運動を全国に見た。仏教と神道という多神教同士の習合しやすい宗教間でも平安時代を除いて「統合的シンクレティズム」は起きなかった。

ましてや汎神教と一神教とでは、まるで水と油であった。厳しい排除律が働いた。西洋文化と日本文化の攻めぎ合い……**地上の君主よりも天上の君主**を上位におくキリシタンたち。当然信長以来の「天下布武」とは相容れない。キリシタンとは危険分子であった。現在、五島の奈留島では全人口の40%がカトリック信者である。プロテスタントは皆無に等しいので、これが全島のキリスト教人口と考えていい。一方、日本全国では、キリスト教人口は日本人人口の1%にも満たない。現代韓国では、プロテスタント人口が40%を越す勢いである。これにカトリック人口を加えると、全キリスト教人口は50%を越す。この違いは、一体何か。母文化、基層文化の相違であるとしか言い様がない。

鯨の海：西海の勇魚取り

鯨法会は春のくれ、	沖で鯨の子がひとり、
海に飛魚採れるころ。	その鳴る鐘をききながら、
浜のお寺で鳴る鐘が、	死んだ父さま、母さまを、
ゆれて水面をわたるとき、	こひし、こひしと泣いてます。
村の漁夫が羽織着て、	海のおもてを、鐘の音は、
浜のお寺へいそぐとき、	海のごこまで、ひびくやら。

（金子みすゞ）

長崎県は現在のところ全国一の鯨肉消費県である。長崎・五島の捕鯨の歴史は古い。捕鯨の技術は、三河、紀州を経て、西海に伝えられた。漁師たちは鯨と同様に、自由に東シナ海や五島灘へやって来た。江戸時代中頃、五島・赤島には泉州佐野の漁師が住み着き、鯨を取った。

『西海鯨鯢記』（1720）によると17世紀初めに紀州の漁師たちが10艘からなる鯨組を引き連れて平戸沖の度島に進出し、翌年には20艘で的大山島に進出した、とある。17世紀後半には73もの鯨組が操業していたようである。当時の捕鯨の主目的は、灯油のための鯨油を採る

ことにあった。捕鯨の方法は、最初は「突取捕鯨」であったが、改良された「網掛突取捕鯨」が紀州より壱岐に導入され、18世紀になると、呼子、壱岐、生月などでは激しい漁場争いが行われた。19世紀には生月の益富組が日本最大の鯨組となっていた。

幕末になると欧米の捕鯨船が日本近海で漁をするようになり、西海まで回遊してくる鯨の数が減少し、捕鯨業の衰退の要因となった。銃殺や各種の砲が導入されたが、やがて捕鯨砲を用いるノルウェー式が主流となっていった。西海の捕鯨は、技術転移の好例である。三河、紀州、西海、五島と転移し、五島の主産業となり、そして、やがて衰退する。

「ごんどう鯨」という名は「五島鯨」が訛ったものらしい。葛飾北斎の『千絵の海 全十図』の「五島鯨突」の版画もあり、五島の捕鯨は江戸でもよく知られていた。なお、鯨とイルカは同じクジラ目である。体長5メートル以下の歯のある鯨をイルカと言い、以上のものを鯨と言う。したがって、「ごんどう鯨」とも「ごんどうイルカ」とも言う。五島はごんどうイルカの自殺の名所でもある。平成2年、三井楽・白良が浜に600頭ものごんどうイルカが打ち上げられたこともあった。

五島の捕鯨の中心は、上五島の有川である。五島を含む西海での捕鯨は、近代捕鯨に変化して行くが、大手漁業会社が五島にも進出し、大洋漁業、日本水産、極洋捕鯨、日東捕鯨の工場が福江島の各地にあった。昭和33（1958）年の五島沖捕鯨総数は219頭、昭和48（1973）年の数頭で最後となった。

交易と異文化情報の海：長崎・五島・西海

冬雨の石階をのぼる

サンタマリヤ

（山頭火「行乞記」）

長崎を出て、遠く東シナ海や南シナ海へ自由に行った朱印船貿易、糸割賦貿易など近世初期の公認貿易だけでなく、明人王直（五峰）に代表される後期倭寇（16世紀）は、中国大陸沿岸を主として活動した。中国人を中心に朝鮮人、日本人、ポルトガル人など多民族集団であった。王直は1540年、五島17代藩主宇久盛定と通商（密貿易）関係にあり、福江・唐人町に居館を与えられていた。その翌年には松浦侯の要請で平戸に移り、通商に携わったが、明の海禁政策により五島を本拠地として倭寇活動に転じた。これらを合わせて考えると、鉄砲伝来はもう少し早く、五島か平戸には既にもたらされていたはずである。種子島が初めてではなからう。

密貿易（抜荷）に関する判例も『犯科帳』には多く記載されている。中でも著名なのは五島沖で抜荷をしたけづり八右衛門である。彼は歌舞伎のモデルにもなった。当時の西国大名は、多かれ少なかれ、抜荷にかかわっていた。

対ポルトガル貿易はキリシタン宣教活動とセットでキリシタン大名たちを潤した。平戸から、横瀬浦へ、次いで長崎へと移るが、ポルトガル人やイングランド人を押さえて勝ち残っ

たのは、オランダ人であった。出島における宗教抜き通商である。長崎はオランダ東インド会社と中国人（おしなべて「唐人」と呼ばれた）との貿易港となった。

西洋の知識を学ぶため蘭学が盛んになる。語学だけではなく、医学や科学、航海術、軍事等、あらゆる分野が貪欲に学ばれる。実際には、オランダ語を通しての西学（**Western learning**）であった。長崎には、日本中から各藩の留学生が来ていた。蘭学仲間を通して各藩の情報も得られた。中には坂本龍馬のように、時代を越えて、次の時代を見据えることができた人材も、この長崎という異文化間交流の場では誕生していた。

長崎奉行所には、唐通事とオランダ通詞が置かれた。やがてオランダ通詞には英語学習が求められ、米英等との新しい国際関係に対応すべく、突然オランダ語の必要性が低下する。中国との貿易額は、オランダ貿易とはまるで比べられないほど多かった。それでも時代の波は、中国語をも飲み込み、明治を迎えて、唐通事たちは在留外国人たちの雑事をこなす便利屋となって糊塗する。

江戸期の日本の支配層は全員漢文をこなした。日本には大量の中国語の書籍が輸入された。その中のかんりの書籍は、漢訳洋書であろう。西洋事情を求めて、かんりの洋書が漢文訳で読まれていたのではないだろうか。高杉晋作が幕府の企画に長州藩から応じて、蒸気船千歳丸で上海に渡海した。彼地でもっとも時間と金をつかったのが、書籍の購入であった。英語と中国語の書籍を求めた。（余談であるが、晋作は西行にちなんで、「東行」と号した。病弱な彼は、東方の守護仏・薬師如来に救いを求めていたのかもしれない。）今や、かつての東アジアの国際共通語であった漢文の効用を見直す時が来ているのではなからうか。

主 要 文 献（順不同）

「つなぐ」海

- 宮本常一・川添登編（1976）『日本の海洋民』未来社
 宮本常一（2003）『海に生きる人びと 日本民衆史3』未来社
 網野義彦（2006）『海と列島の中世』講談社学術文庫
 網野義彦（2009）『海民と日本社会』新人物文庫
 荒野泰典・石井正敏・村井章介編（1992）『アジアの中の日本史 III 海上の道』東京大学出版会
 村井章介（2011）「うみがつないだニッポン」『歴史は眠らない』NHKテレビテキスト
 鶴見和子（1981）『好奇心と日本人』講談社現代新書
 梅棹忠夫（1974）『文明の生態史観』中公文庫
 内田樹（2010）『日本辺境論』新潮新書
 柳田国男（2008）『海上の道』岩波文庫
 小島毅（2006）『海からみた歴史と伝統 遣唐史・倭寇・儒教』勉誠出版
 岸野久（2001）『ザビエルの同伴者 アンジロー』歴史文化ライブラリー126, 吉川弘文館
 荒野泰典・石井正敏・村井章介『倭寇と「日本国王」』日本の対外関係4, 吉川弘文館
 山田吉彦（2006）『海賊の掟』新潮新書
 デイヴィッド・コーディングリ編／増田義郎監修『図説 海賊大全』東洋書林
 水島司（2010）『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社
 アンドレ・グンダー・フランク／山下範久訳『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』

(藤原書店)

川勝平太編 (2002) 『グローバル・ヒストリーに向けて』 (藤原書店)

水島司編 (2008) 『グローバル・ヒストリーの挑戦』 山川出版社

求道の海

東野治之 (2007) 『遣唐使』 岩波新書

東野治之 (2007) 『遣唐使船 東アジアのなかで』 (朝日選書)

住吉大社編 (2008) 『遣隋使・遣唐使と住吉津』 東方出版

遣唐使船再現シンポジウム (2010) 『遣唐使船の時代——時空を駆けた超人たち』 角川選書

上田雄 (2006) 『遣唐使全航海』 草思社

王勇 (1998) 『唐から見た遣唐史 混血児たちの大唐帝国』 講談社選書メチエ125

森公章 (2010) 『遣唐史の光芒 東アジアの歴史の使者』 角川選書

立川武蔵 (1998) 『最澄と空海——日本仏教思想の誕生』 講談社選書メチエ

高木呻元 (2009) 『空海 生涯とその周辺』 吉川弘文館

井上靖 (2000) 『補陀落渡海記 井上靖短編名作集』 講談社文芸文庫

川村湊 (2005) 『補陀落 観音信仰への旅』 作品社

南海への道

小倉貞男 (1989) 『朱印船時代の日本人 消えた東南アジア日本人町の謎』 中公新書

宮本又次 (1972) 『宮本又次著作集第8巻大阪町人編』 講談社

宮本又次 (1957) 『大阪町人』 アテネ新書, 弘文堂

宮本又次 (2010) 『大阪商人』 講談社学術文庫

西への思い

目崎徳衛 (2008) 『西行』 吉川弘文館

白洲正子 (2007) 『西行』 新潮社

安田章生 (1993) 『西行』 弥生書房

渡部治 (1998) 『西行』 清水書院

湯原公浩 (2010) 『西行 捨てて生きる』 別冊太陽

富岡多恵子 (2010) 『釋道空ノート』 岩波現代文庫

林浩平 (2009) 『折口信夫 霊性の思索者』 平凡社新書

キリシタンの海

フロイス／松田毅一・川崎桃太訳 (1985) 『日本史全12巻』, 特に9-12巻

岡田章雄 (1980) 『キリシタン大名』 教育社歴史新書

H・チースリク (2000) 『高山右近史話』 聖母文庫

海老沢有道 (2009) 『高山右近』 吉川弘文館

谷晃 (2007) 『茶人たちの日本文化史』 講談社現代新書

松田毅一 (1980) 『南蛮のバテレン 東西交渉史の問題をさぐる』 NHKブックス

岸野久・村井早苗編 (1996) 『キリシタン史の新発見』 雄山閣出版

井手勝美 (1995) 『キリシタン思想史研究序説——日本人のキリスト教受容』 ペリかん社

海老沢有道 (1990) 『日本キリシタン史』 塙選書

津山千恵 (1994) 『キリシタン拷問史』 三一新書

清水紘一 (1981) 『キリシタン禁制史』 教育社歴史新書

- 古野清人 (1978) 『隠れキリシタン』日本歴史新書, 至文堂
 五野井隆史 (1990) 『日本キリスト教史』吉川弘文館
 高瀬弘一郎 (1993) 『キリシタンの世紀 ザビエルから『鎖国』まで』岩波書店
 佐久間正 (1978) 『南蛮人のみた日本』TOMO 選書, 主婦の友社
 フィリップ・レクリプアン／鈴木宣明監修 (1996) 『イエズス会 世界宣教の旅』知の再発見双書53
 創元社
 高橋裕史 (2006) 『イエズス会の世界戦略』講談社選書メチエ
 H・チースリク (2005) 『キリシタン史考』聖母文庫
 山本博文 (2009) 『殉教 日本人は何を信仰したか』光文社新書
 宮崎賢太郎 (2008) 『カクレキリシタン オラショ——魂の通奏低音』長崎新聞新書
 坂井信生 (2005) 『明治期長崎の本キリスト教 カトリック復活とプロテスタント伝道』長崎新聞新書
 松田毅一 (2001) 『天正遣欧使節』朝文社
 片岡弥吉 (2010) 『日本キリシタン殉教史』智書房
 遠藤周作 (2007) 『切支丹の里』中公文庫
 遠藤周作 (1992) 『切支丹時代 殉教と棄教の歴史』小学館ライブラリー
 不干斎ハビアン『妙貞問答』, 海老沢有道他編(1990) 『キリシタン教理書』教文館
 積徹宗 (2009) 『不干斎ハビアン 神も仏も棄てた宗教者』新潮選書
 マイケル・クーパー／松本たま訳 (1991) 『通辞ロドリゲス』原書房
 米井力也 (2009) 『キリシタンと翻訳 異文化接触の十字路』平凡社
 田中英道 (1994) 『支倉六衛門と西欧使節』丸善ライブラリー
 松永伍一 (1984) 『ペトロ岐部 追放・潜入・殉教の道』中公新書
 煎本増夫 (1980) 『島原の乱』教育社歴史新書
 近藤儀左エ門 (1990) 『改訂復刻版 生月史稿——かくれきりしたんの島』肥前歴史叢書2 芸文堂

五島の海

- 浦川和三郎 (2009) 『五島キリシタン史』(複製) 非売品
 郡家真一 (1985) 『海鳴りの五島史』国書刊行会
 平山徳一 (1989) 『五島史と民俗』正文社印刷
 櫻井隆 (2009) 『みみらく雑稿』藤室印刷
 永治克行 (2006) 『五島雑学辞典』ゆるり書房
 有吉佐和子 (2009) 『日本の島々, 昔と今。』岩波文庫

鯨の海

- 中園成生 (2006) 『くじら取りの系譜』長崎新聞新書
 立平進 (1997) 『西海のくじら取り』ろうきんブックレット
 矢代嘉春 (1983) 『日本捕鯨文化史』新人物往来社
 中園成生・安永浩 (2009) 『鯨取り絵物語』弦書房
 日野浩二 (2005) 『鯨と生きる 長崎のクジラ商日野浩二の人生』長崎文献社
 鳥巢京一 (1993) 『西海捕鯨業史の研究』九州大学出版会
 山下涉登 (2004) 『捕鯨Ⅰ』ものと人間の文化史, 法政大学出版局
 山下涉登 (2004) 『捕鯨Ⅱ』ものと人間の文化史, 法政大学出版局
 村山司『イルカ 生態, 六感, 人との関わり』中公新書
 中澤克昭編 (2009) 『人と動物の日本史2 歴史のなかの動物たち』吉川弘文館
 中村生雄・三浦佑之編 (2009) 『人と動物の日本史4 信仰のなかの動物たち』吉川弘文館

交流の海

- 宮崎正勝 (2007) 『ザビエルの海 ポルトガル「海の帝国」と日本』原書房
- 松井洋子 (2010) 『ケンペルとシーボルト「鎖国」日本を語った異国人たち』山川出版社
- 林陸朗 (2010) 『長崎唐通事 大通事林道栄とその周辺』長崎文献社
- 惣郷正明 (1984) 『洋学の系譜——江戸から明治へ』研究社出版
- 榎本泰子 (2009) 『上海 多国籍都市の百年』中公新書
- 奈良本辰也 (2009) 『高杉晋作 維新前夜の群像1』中公新書
- 一坂太郎 (2002) 『高杉晋作』文春新書
- 古川薫 (2010) 『高杉晋作 その魅力と生き方』新人物往来社
- 森永種夫 (1993) 『犯科帳——長崎奉行の記録』岩波新書
- 森永種夫 (1993) 『流人と非人——続・長崎奉行の記録』岩波新書
- 森永種夫 (1966) 『幕末の長崎——長崎代官の記録』岩波新書
- 安高啓明 (2011) 『新釈犯科帳 (一) 長崎奉行所判例集』長崎文献社
- 大隅三好 (2002) 『遠島 島流し』江戸時代選書14, 雄山閣
- 小石房子 (2005) 『江戸の流刑』平凡社新書
- 丸山やす成 (2007) 『参勤交代』日本歴史叢書, 吉川弘文館
- 山本博文 (1998) 『参勤交代』講談社現代新書
- 鈴木眞哉 (2004) 『戦国鉄砲・傭兵隊 天下人に逆らった紀州雑賀衆』平凡社新書
- 宇田川武久 (2006) 『真説 鉄砲伝来』平凡社新書
- 近藤好和 (2010) 『武具の日本史』平凡社新書
- ロナルド・トビ (2008) 『「鎖国」という外交』全集日本の歴史文化第9巻, 小学館
- 永積洋子編 (2001) 『「鎖国」を見直す』シリーズ国際交流1, 山川出版社
- 加藤栄一・山田忠雄編 (1981) 『鎖国』講座日本近世史2, 有斐閣
- 松方冬子 (2010) 『オランダ風説書「鎖国」日本に語られた「世界」』中公新書
- 石田純郎編著 (1988) 『蘭学の背景』思文閣出版
- 高梨健吉 (1978) 『文明開化の英語』藤森書店
- 明石康・NHK「英語でしゃべらナイト」取材班 (2004) 『サムライと英語』角川書店
- 惣郷正明 (1983) 『英語学び事始め』朝日イブニングニュース社
- 竹内誠監修 (2009) 『外国人が見た近世日本 日本人再発見』角川学芸出版

Topography of Goto and Nagasaki on Intercultural Communication

Jun TOYAMA

The Archipelago of Goto lies west of Nagasaki and east of the East China Sea. Goto was once believed by the people of Miyako (Old Capital) to be the place where one could see the deceased because the islands were located westernmost of Japan, in other words, they were closest to the Amida's Pure Land in the west.

Many people sailed from this place for China to study Buddhism and the advanced civilisation of the continent. Included were priests like Kukai and Saicho, who founded the basis of Japanese Buddhism after they returned to the Japanese soil.

The sea of Goto and Nagasaki was then occupied by international traders, Japanese, Koreans, Chinese, even some Portuguese, many of whom were pirates called "wako" by Chinese. They brought guns to Japan.

Christianity was also brought to Japan in the mid-16th century. A Jesuit Francisco de Xavier arrived in Kagoshima. He soon started missionary work in Hirado, a northern island of Nagasaki. It all started from here protracted bloody battles with the Western culture. This was Japan's first encounter with Christianity and Western thought. The battles spreaded widely in Japan. Feudal lords were more interested in trading business than the Western religion. The oppression became violent in the early 17th century and more than 4000 Catholic devotees were tortured and killed. All Fathers were deported overseas.

The Sea of Goto was the sea of whale fishery, too. The Archipelago was once well known for catching whales. Whaling was the chief industry here for many centuries. However, it has fallen into a rapid decline. An overwhelming number of whalers from America and Europe soon drove Japanese boats out of the region of Goto and Nagasaki.

People of Nagasaki seem to be enjoying the mixed atmosphere of their culture, partly Chinese, partly Western, blended into the indigenous Japanese.

Topography of Goto and Nagasaki on Intercultural Communication

Jun TOYAMA

The Archipelago of Goto lies west of Nagasaki and east of the East China Sea. Goto was once believed by the people of Miyako (Old Capital) to be the place where one could see the deceased because the islands were located westernmost of Japan, in other words, they were closest to the Amida's Pure Land in the west.

Many people sailed from this place for China to study Buddhism and the advanced civilisation of the continent. Included were priests like Kukai and Saicho, who founded the basis of Japanese Buddhism after they returned to the Japanese soil.

The sea of Goto and Nagasaki was then occupied by international traders, Japanese, Koreans, Chinese, even some Portuguese, many of whom were pirates called "wako" by Chinese. They brought guns to Japan.

Christianity was also brought to Japan in the mid-16th century. A Jesuit Francisco de Xavier arrived in Kagoshima. He soon started missionary work in Hirado, a northern island of Nagasaki. It all started from here protracted bloody battles with the Western culture. This was Japan's first encounter with Christianity and Western thought. The battles spreaded widely in Japan. Feudal lords were more interested in trading business than the Western religion. The oppression became violent in the early 17th century and more than 4000 Catholic devotees were tortured and killed. All Fathers were deported overseas.

The Sea of Goto was the sea of whale fishery, too. The Archipelago was once well known for catching whales. Whaling was the chief industry here for many centuries. However, it has fallen into a rapid decline. An overwhelming number of whalers from America and Europe soon drove Japanese boats out of the region of Goto and Nagasaki.

People of Nagasaki seem to be enjoying the mixed atmosphere of their culture, partly Chinese, partly Western, blended into the indigenous Japanese.